

平成 21 年 3 月 31 日現在

研究種目：基盤研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18402015
 研究課題名(和文) 中国の台頭と東南アジア
 研究課題名(英文) The Rise of China and Southeast Asia

研究代表者

白石 隆 (SHIRAIISHI TAKASHI)
 政策研究大学院大学・政策研究科・教授
 研究者番号：40092241

研究成果の概要：

中国の経済的台頭によって、近年、東アジア地域秩序にどのような変容がもたらされつつあるか。本研究はこれを international, transnational, national の三つの側面について分析する。まず国家間関係についてみれば、東南アジアのすべての国々は中国に対して soft balancing を行っているが、そのための手段は世界経済への統合のレベル、地政学的位置によって違う。その一方、中国との経済関係の深化、人的交流の拡大にともない、国によっては国内政治における勢力配置、国益定義のパラメーターそれ自体が変化しつつあるところもある。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	4,800,000	0	4,800,000
2007年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
2008年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
年度			
年度			
総計	13,200,000	2,520,000	15,720,000

研究分野：東南アジア研究

科研費の分科・細目：政治学・国際関係論

キーワード：中国、東南アジア、東アジア地域秩序、中産階級、政治、非伝統的安全保障問題、新華僑、金融

1. 研究開始当初の背景

本研究は申請者(白石)が平成15-17年、科学研究費補助金基盤研究(B)(2)を得て実施した研究「東アジアの地域化と中産階級-アメリカ化・中国化・日本化」に続くものである。

この研究(「東アジアの地域化と中産階級-アメリカ化・中国化・日本化」)においては、1980年代から1990年代の東アジアの地域的経済発展の中で成立した新しい中産階級に注目し、その台頭とともにこの地域でどのような国内政治経済体制が編成されようとし

ているか、またこれが東アジア地域形成にとって長期的にどのような意義をもつものであるかを、「アメリカ化」、「日本化」、「中国化」を鍵概念として分析しようとするものであった。ただし、ここで「アメリカ化」というのは、アメリカ人と「同じ言語」を共有し、アメリカ人と同じようにものを考える人々が台頭し、アメリカの規範が「普遍的なものとして受け入れられていくプロセス」、「日本化」とは、日本企業の直接投資の拡大と日本人のプレゼンスの増大、さらには日本の「生産性の政治」の外延的拡大によって、日本的経営、日本的な政治経済モデル、日本の文化(ファッション、生活スタイル、マンガ、アニメなど)が普及していくプロセス、さらに「中国化」とは、東南アジア各地における華人コミュニティの存在を前提として、1970年代以降、東アジアの経済発展のなかでしだいに力をつけた華人が、一方では新中産階級化し、また一方では国境を越えて超国籍化(transnationalization)していくプロセスをいう。東アジア・東南アジアの大都市に台頭した中産階級はまさにそうした「アメリカ化」、「日本化」、「中国化」によって生み出された。この研究ではこのように定義された「アメリカ化」、「日本化」、「中国化」を鍵概念として(1)マニラ、バンコク、ジャカルタの華人コミュニティを取り上げ、1980年代以来の経済発展とグローバル化と地域化のなかで、華人コミュニティがどのように変貌しつつあるかを社会史的に分析する、(2)タイ、フィリピン、インドネシア、マレーシアにおいて中産階級はどのように形成され、政治、経済、社会、文化的にどのような特徴をもっているか、これを比較政治学的観点から分析する、(3)「アメリカ化」、「日本化」、「中国化」などのプロセスのなかで、中産階級がいまどのような規範と生活スタイルと政治経済シ

ステムを受け入れ、どのようなアイデンティティを形成しつつあるのか、これを国内政治経済体制の再編、東アジア地域秩序の形成との関連で明らかにする、この三つを大きな課題とした。

しかし、この研究においては、「中国化」を東南アジア華人のトランスナショナルなネットワーク形成という観点から捉え、中国の台頭が地域と東南アジアそれぞれの国のレベルにおいてどのような変容をもたらしつつあるかを理解するには不十分だった。このような背景のもと、今回の研究においては中国の台頭と東南アジアの変容をテーマの中心に据え、更なる分析をおこなうことを目的とした。

2. 研究の目的

中国は、2002年決定の「中華民族の偉大な復興」において、その戦略目標として、2020年のGDPを2000年の4倍、4兆4000億ドルに設定し「小康社会」を実現するとしており、現在の為替レートで計算すると、その頃までに中国の経済規模は日本のそれを凌駕することになる。また購買力平価で見れば、中国の経済規模はすでに1994年に日本を上回り、2002年にはアメリカの半分を超えたと推計される。こうした中国の経済的台頭は、世界的にも、地域的にも、力の均衡を大きく変化させる。ではそれは東南アジアにおいてどのような意義を持っているのか。中国の台頭にともない、東南アジアではどのような変化がおこっているのか。本研究では、この問題を、地域秩序のレベル、そして東南アジア各国における政治経済、社会のレベルにおいて検討することを目的とする。

まず地域秩序のレベルにおいては、中国の台頭が、第2次大戦後、アメリカのヘゲモニーの下に編成された東アジアの地域秩序に

とってどのような意義をもっているのかを検討する。よく知られる通り、第2次大戦後、東アジアの安全保障秩序は、アメリカをハブ、日米、米韓、米比など、二国間の安全保障条約、基地協定、施設利用協定をスポークとする「ハブとスポークのシステム」として編成された。アメリカはこのシステムを基礎としてこの地域の安定を維持し、そうした「アメリカの平和」の下、タイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンなどの東南アジアの国々は、日本との「経済協力」によって上からの国家建設・経済発展を行った。これがどれほどうまくいったかは国によって違う。しかし、そうした開発主義の時代は1997-98年のアジア経済危機をもって終焉した。またちょうどその頃から、中国の経済的台頭が、日本の経済的停滞と相俟って、この地域における力の均衡に変化をもたらすようになった。たとえば、中国は、2000年、アセアンとの自由貿易協定を提案し、2004年にはモノの貿易について協定を締結した。2002年には、ブノンペンで開催されたアセアン・中国サミットにおいて、南シナ海における行動規範に関する共同宣言に署名し、アセアンとの包括的経済協力、非伝統的安全保障協力についても合意した。ついで2003年にはアセアンとの「平和と繁栄のための戦略的パートナーシップに関する共同宣言」に調印し、東南アジア友好協力条約にも署名した。さらにまた中国は南シナ海での資源探査、インドネシアにおける石油・ガス開発（たとえば、かりに中国のCNOOCがUnocalの買収に成功していれば、中国はインドネシアにおいて外国資本の持つ石油利権の半分以上を支配するところだった）、海軍力の近代化、昆明からミャンマーのシットウェに至るパイプライン建設計画、昆明からラオス経由、バンコクに至る南北回廊の建設など、実にさまざまな活動を行って

いる。ではこうした中国の活動、それを支える中国の経済的台頭は、東南アジアの地域秩序にどのような意義を持ち、この地域における日本、アメリカの戦略的利益と、どこで、どのように、抵触することになりそうか。

もう一つ、本研究で検討したいことは、中国の経済的台頭が東南アジアのそれぞれの国において、政治経済、社会のレベルでどのような変化をもたらしているかという問題である。そこでのポイントは、中国政府がどのような「意図」をもってこの地域で活動するかと関わりなく、中国の経済的台頭が東南アジアの国々で政治的、経済的、社会的にさまざまな変化をすでにひきおこしつつあり、それが長期的に地域システムの変容を促すことにもなりうるということである。これをもう少し具体的に言えば、次のような現象を意味する。

その一つは社会的変化、特に華人の再中国人化(resinicization)ともいべき現象である。東南アジアの大陸部ではカンボジアを別として全ての国が中国と国境を接し、近年、国境貿易が急速に拡大し、中国からの人の流入が拡大している。こういうところではもちろん、さらには中国と海を隔てたフィリピン、インドネシアなどにおいても、中国との貿易が拡大し、人の往来が増え、中国人であることがビジネスになると人々が理解するようになるにつれ、各地に中国語学校が設立されて、すでに何世代もこの地域に居住して「同化」してきた華人の子どもたちが中国語（普通語）を学び、現地語と中国語のバイリンガル（多くは現地語と中国語と英語のトリリンガル）になりつつある。

もう一つは中国の台頭にもなう政治経済的変化である。これについては、特に、政府の戦略的対応、それにもなう現地（華人）企業と中国企業の連携に注目する。たとえば、

タイ、ミャンマー、インドネシアを見れば、この三国が中国の台頭に直面してきわめて違う戦略をとっていることが直ちに見てとれる。タイは南北回廊の建設で中国と連携し、東西回廊の建設で日本と提携する。タイはまた、自動車産業、ツーリズム、アグロビジネスを戦略産業分野と同定するが、そのうち自動車産業は日本、アメリカの自動車産業との連携を図るものであり、一方、ツーリズム、アグロビジネスは中国からの観光客、中国の市場に期待する。このようにタイの戦略は日本、アメリカ、中国の均衡をはかるものである。これに対し、ミャンマーは 1980 年代末以降、アメリカの経済封鎖に直面して中国への依存を深め、いまでは中国の「戦略的パートナー」になってしまった。さらにまたインドネシアでは次々と政権が交代し、現政権も諸勢力の連合である事情を反映して、中国の台頭に対しても、なんらの戦略的対応をとることもできず、ともかく「とれるものをとろう」とアドホックに、機会主義的に行動している。

本研究では、したがって、上のような問題関心にもとづき、東アジア、特に東南アジアにおいて、中国の経済的台頭が、どのような変化をもたらしつつあるか、これを地域秩序のレベルとそれぞれの国における政治経済、社会のレベルにおいて分析することを目的とするものである。

3. 研究の方法

研究は、東南アジア、中国での現地調査、調査データの処理、分析という方法で実施した。白石は東アジアにおける地域秩序の形成と変容に関する調査を、特に中国政府、東南アジア各国政府の動向に関して、政府要人のインタビュー、現地語の新聞、雑誌、その他の文献によるデータ収集を中心に実施した。ハ

ウは東南アジア、特にフィリピン、タイ、インドネシアにおける華人の「再中国人化」に関する社会文化的調査を行った。華人がじぶんたち、特に子どもたちの将来についてどのようなビジョンをもっているか、また華人を見る現地社会の「目」がどう変わりつつあるかについて、社会学的データを収集するとともに、映画、小説、テレビドラマなどにおいて「華人」がどのように表象されているかを分析した。原は中国雲南省からラオスへの中国人の流入について、データを収集し、その政治経済的意義を分析した。岡本は東南アジア各地における地方政治とビジネスについて、特にインドネシア、タイ、フィリピンの比較を念頭に置きつつデータを収集した。本名は海賊、木材不法伐採・密輸など、非伝統的安全保障問題に焦点を合わせつつ、中国・東南アジア関係を分析した。データの収集は政府関係者、研究者とのインタビュー、公刊資料の収集を通じて行った。鬼丸は東南アジアと中国の間での人の行き来が増加することによって懸念される、感染症の問題について、主に東南アジア諸国での新型インフルエンザ対策に焦点を絞り、調査を行った。久末は東南アジアと中国の間のカネの流れについて、マネーロンダリング問題や人民元の東南アジアでの流通の側面から分析を行った。

4. 研究成果

中国の経済的台頭によって、東アジア地域秩序にどのような変容をもたらされつつあるか。これについては、近年、balancing, hedging, bandwagoning といった国際政治の概念を援用して多くの研究が発表されている。本研究の特徴は、こうした inter-state relations における秩序変容とともに、中国の台頭が通商、投資、援助の拡大、人の交流の増加等とともに、transnational, national

なレベルでどのような変化をもたらしつつあるかをあわせて分析するところにある。

その研究成果は以下に記すところであるが、そこでの重要な知見としては、(1) 東南アジアの国々は中国に対してそれぞれに soft balancing の戦略をとっており、そこでの balancing のやり方はそれぞれの地政学的位置、世界経済への統合度、日本、欧米諸国との関係等によって決まる、(2) 中国との経済関係の拡大、人的交流の増大によって、東南アジア諸国の国益定義のパラメーターが変わりつつあり、また東南アジアの多くの国々で華人を見る「目」に重要な変化が起こりつつあること、の2点が挙げられる。

本研究の成果は以下に記す通りであるが、これに加え、白石隆・高原明生編の研究書の公刊、Peter J. Katzenstein が北京にて開催予定のワークショップへの寄稿（白石隆、ハウ・カロライン）も予定されている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 19 件)

- ① 白石 隆、キャロライン・ハウ. 「『アジア主義』の呪縛を超えて - 東アジア共同体再考」査読無、『中央公論』2009 年 3 月号、168 - 179 頁.
- ② Hau, Caroline. “Blood, Land and Conversion: ‘Chinese’ Mestizonez and the Politics of Belonging in Jose Angliongto’s *The Sultanate*,” 査読有、『*Philippine Studies*』57.1 (2009): pp. 3-48.
- ③ Honna, Jun. “The Peace Divided,” 査読有、『*Inside Indonesia*』Vol. 92, 2008, pp. 79-122.
- ④ 白石 隆. 「国境を越える脅威にどう立ち向かうか - アジアにおける非伝統的安全保障と地域協力を考える」査読無、『*外交フォーラム*』2008 年 10 月号、46-47 頁.
- ⑤ 本名 純. 「日本の得意分野を生かした協力を - テロ対策と海賊対策」査読無、『*外交フォーラム*』2008 年 10 月号、48-50 頁.
- ⑥ 鬼丸 武士. 「新型インフルエンザ対策

－何をなすべきか」査読無、『*外交フォーラム*』2008 年 10 月号、54-56 頁.

- ⑦ 久末 亮一. 「アジアにおけるマネー・ロンダリング問題 - その実態、対策の限界、そして課題 -」査読無、『*外交フォーラム*』2008 年 10 月号、51-53 頁.
- ⑧ 白石 隆. 「日本のアジア外交を考えるために」査読無、『*外交フォーラム*』2008 年 4 月号、60-63 頁.
- ⑨ 岡本 正明. 「細分化する地域主義とその後のポリティクス - 民主化・分権化後のインドネシアから」査読有、『*地域研究*』第 8 巻第 1 号、2008 年 3 月、128-143 頁.
- ⑩ Hau, Caroline. “Cultural Politics of Chineseness,” 査読無、『*華僑華人研究*』第 5 号、2008 年、1 - 20 頁.
- ⑪ 原 洋之介. 「東アジアの中での日本の食料安全保障とは: 流通革命・環境悪化・国際協力の視点から」査読無、『*RINA Report*』Vol. 80、環日本海経済研究所、2008 年 2 月.
- ⑫ 相沢 伸広. 「華人社会の変容」査読無、『*アジア研ワールドトレンド*』154 号、2008 年、25-27 頁.
- ⑬ 本名 純. 「マフィア・国軍・安全保障 - 東南アジアにおける越境犯罪の政治分析」査読有、『*国際政治*』149 巻、2007 年、127-140 頁.
- ⑭ 相沢 伸広. 「乗っ取られた同化政策スハルト体制の内務省と対華人政策」査読有、『*東南アジア研究*』第 45 巻 1 号、2007 年、37-56 頁.
- ⑮ 相沢 伸広. 「中国と華人世界の間で」査読無、『*創文*』2007 年 1/2 月号、14-17 頁.
- ⑯ 本名 純. 「深刻化する東アジアの越境犯罪」査読無、『*治安フォーラム*』2006 年 12 月号、60-70 頁.
- ⑰ 白石 隆. 「次期首相が取るべきアジア戦略とは」査読無、『*中央公論*』2006 年 10 月号、98 - 105 頁.
- ⑱ 相沢 伸広. 「第五列から資本家へ - 華人・華僑問題とインドネシア - 中国関係 1966 - 1990」査読有、『*国際政治*』第 146 号、2006 年、156-171 頁.
- ⑲ 本名 純. 「インドネシア: ODA による初の「武器」供与と海賊対策」査読無、『*世界週報*』2006 年 6 月 27 日号、52-53 頁.

[学会発表] (計 6 件)

- ① Shiraishi, Takashi. “Emerging Global Strategic Scenarios and Implications,” Seminar: Government of the Future, Global Geo-Politics and

- Economic Trends, Feb. 10-11, 2008, National Institute of Public Administration (INTAN), Kuala Lumpur, Malaysia.
- ② Honna, Jun. "Toward a New Paradigm for the Regional Maritime Security Governance," ASEAN ISIS - JICA Research Project "Mainstreaming Human Security in ASEAN Integration", 18 June 2008, Manila, Philippines.
- ③ 相沢 伸広. 「チナ問題とインドネシア - 中国関係 1965-67」、日本華僑華人学会、2008年1月26日、東洋大学。
- ④ 本名 純. 「東アジアにおける越境犯罪に対する日台海上保安協力の重要性」、第2回日台周辺海域における海上保安フォーラム、2007年11月29日、福華国際文教会館、台湾。
- ⑤ Shiraishi, Takashi. "Only Yesterday: China Japan and the Transformation of East Asia," Keynote Speech delivered at The Cold War in Asia: Beyond Geopolitics and Diplomacy, held at Sun Yat-sen University, Guangzhou, China, 1 - 2 November 2007 (An international workshop jointly organized and sponsored by Centre for Chinese Studies, University of Manchester, Department of East Asian Languages and Civilizations, Harvard University, and School of Humanities, Sun Yat-sen University)
- ⑥ 本名 純. 「東アジアの非伝統的安全保障問題」、『アジアの課題と日本』研究会、2007年4月20日、総合研究開発機構。

[図書] (計2件)

- ① Shiraishi, Takashi and Pasuk Phongpaichit (eds). *The Rise of Middle*

Classes in Southeast Asia (Kyoto: Kyoto University Press, 2008, Kyoto Area Studies on Asia Volume 17).

- ② Shiraishi, Takashi. *Across the Causeway: A Multi-dimensional Study of Malaysia-Singapore Relations* (Institute of Southeast Asian Studies, 2008).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

白石 隆 (SHIRAISHI TAKASHI)
政策研究大学院大学・政策研究科・教授
研究者番号：40092241

(2) 研究分担者

原 洋之介 (HARA YONOSUKE)
政策研究大学院大学・政策研究科・教授
研究者番号：60012986
ハウ・キャロライン (HAU CAROLONE)
京都大学・東南アジア研究所・准教授
研究者番号：70314268
本名 純 (HONNA JUN)
立命館大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：10330010
岡本 正明 (OKAMOTO MASAOKI)
京都大学・東南アジア研究所・准教授
研究者番号：90372549
鬼丸 武士 (ONIMARU TAKESHI)
政策研究大学院大学・政策研究科・助教授
研究者番号：80402824
相沢 伸広 (AIZAWA NOBUHIRO)
アジア経済研究所・地域研究センター・研究員
研究者番号：10432080
久末 亮一 (HISASUE RYOICHI)
政策研究大学院大学・政策研究科・研究助手
研究者番号：60422383